

2. アイルランドにおけるマイノリティとスポーツ

—トラベラー・コミュニティー—

坂 なつこ

はじめに

スポーツを通じたマイノリティへの取り組みは、アイルランドにおいても多く行われている。そのなかでも、本稿では、アイルランド社会において「最も周辺化され、不利な環境におかれた集団」である「トラベラーTraveller」について取り上げる¹⁾。ロマやジプシーなどと同じく放浪民を起源とするといわれるトラベラーの人びとは、アイルランド社会において、独特な位置づけを持つ。1990年代後半の経済成長によって、国民の生活水準は向上した。しかし、トラベラーの人びとを取り巻く環境は、後述するように大きな変化はみられない。トラベラーは、特徴的な生活様式、文化を持つ一方で、「貧しさの文化」と常に結びつけられ、様々な場面で偏見や差別にさらされている。そのなかで、スポーツは、その独特の文化を表象する場でもあり、他方、他のエスニックマイノリティと同様に、スポーツを介した差別の克服、相互理解の場としても捉えられている。多様な他者が存在する社会において、スポーツはどのような意味をもちうるのか、内なる他者をかかえるアイルランド社会を概観するなかで考えていきたい。

アイルランド社会とレイシズム

アイルランド共和国政府は2010年11月に欧州連合への金融支援を要請した。2011年の経済成長率は0.7%と、2010年のマイナス成長よりは伸びたものの、依然として厳しい状況であることには変わらない。経済成長と危機は、アイルランド社会に資本や金の流れだけではなく、人の流れももたらした。19世紀半ばの大飢饉以降、多くの国民

を海外に移民として送り続けてきたが、2004年には人口がはじめて大飢饉後の数字を上回り、労働者や政治的難民など海外から移民を受け入れる国となったのであった。2006年の国勢調査においては、42万人あまりが外国籍であるとされ、これはほぼ10人に1人の割合であった。2002年の国勢調査においては、外国で生まれた人の数が約22万人であったから、2006年時点ではほぼ2倍である。2011年国勢調査でも、約54万人と増加しており、ポーランドが最も多く(約12万2千人)、英国の約11万2千人を上回った。リトアニア、ルーマニアなどからの移動も目立っている。アイルランド社会がより多国籍・多文化となっていることが示された。

北アイルランドが英国に属し、現在でも「分断社会」であるが、文化的には、カソリック・アイルランド、ケルトなど、一般的に「単一文化社会」として描かれがちである。国内においても、宗教的セクト主義はあってもエスニックマイノリティは存在しない、と一般に信じられていた。しかし、上記のような社会的変化のなかで、人種主義や人種差別(racism)が、社会問題として浮上してくるようになる。経済成長の最中2002年1月に起きたアイルランド人の若者による中国人学生殺害は、メディアによって「初めての人種差別的動機による殺人」として注目された²⁾。R. McVeighとR. Lentinは、このことが広く信じられていた「アイルランドにレイシズムはない」という神話を崩壊させたとする³⁾。

B. Fanningは、アイルランドにおける人種差別は決して新しい現象ではないが、19世紀以降のイギリス帝国主義と植民地主義の関連から、それは複雑な様相をもっているとしている。アイルラン

ド人は移民先で「白人の中の黒人」といわれ、職業差別などを受け続けてきた⁴⁾。Fanning は、アイルランドにおいては、皮膚の色など外見に対する差別、黒人差別やエスニックマイノリティへの「差別 racism」という意味合いよりも、「外国人嫌悪 Xenophobia」が用いられるとする⁵⁾。レイシズムという言葉よりも、「よそ者への嫌悪」としての「ゼノフォビア」は、「新しいマイノリティ・コミュニティによって突きつけられた排他性は、均質的社会からの反応である」という議論に適合していたのであった。「ゼノフォビア」はしばしば、自然で、普遍的で、そのため法に違反するようなものではなく、自衛の反応であると考えられているとする。19世紀後半の国家形成過程において「単一文化社会としてのアイルランド」という言説もまた形成される。そのためゼノフォビアの概念には様々な問題も付与されている。マイノリティの文化に対する恐怖が自然なものとして認知されるとすれば、その同化や破壊もまた正当化されるのである。異なる生活様式をもつトラベラーの人びとは「よそもの」であり、一般的なアイルランド人の生活様式が都市化し、近代化する中で、いっそうその「排他性」が際立つことになるのである。

トラベラーの人びと：健康問題

2006年の国勢調査では、約2万2千人がアイルランド共和国に居住しているとされ、北アイルランドでは1,770人程度と考えられている⁶⁾。

歴史的には12世紀頃から認識される遊牧民に起源するとされるが、資料は乏しく、現在のトラベラーへと関連づけられるのは、19世紀半ばの大飢饉頃であるとされる。元来は工芸、芸能、馬の売買、郵便、ブリキ職人など、職業や季節に応じて場所を移動して生活する人びとのことであった。英語を用いるが、「Shelta」あるいは「Gammon（あるいは Gamin）」と呼ばれる彼らの独特の言語を持っている⁷⁾。1963年にまとめられた公式のレポートでは、「itinerant（放浪者）」という用語を使

い、「芸能や旅芸人を除く、住居を定めず、習慣的に場所から場所へ移動する人びと」と定義づけられていた⁸⁾。トラベラー・コミュニティに関する公式のレポートは、その後「トラベラー調査機関報告（Report of the Travelling People Review Body）」（1983年）、「トラベラー・コミュニティについての特別調査委員会報告（Report of the Task Force on the Travelling Community）」（1995年）とまとめられた。これらの調査報告によって、トラベラーの人びとの生活環境が、他の「定住する」アイルランド人と比して著しく劣悪であることが、「公式に」明らかになったといえる。多くが、キャラバンやトレーラーを居住地としており、高い失業率、低い賃金水準、低い教育水準などが指摘された。その居住形態により社会保障の枠外におかれていた。

そのため、健康状態についても、一般のアイルランド人と著しく差がある。1987年にまとめられた健康調査委員会の報告によって、以下の点が明らかにされた。

- ・平均寿命は、男性 62 才、女性 65 才（一般の平均は男性 72 才、女性 77 才）。
- ・65 才以上の割合は 2%（一般では 10.7%）。
- ・普通出生率は、34.9 人／1,000 人（一般では 16.6 人）。

報告では、さらに、多くのトラベラーが若いうちに結婚し、子どもを多く持つこと、死産も含め死亡率が高く、その原因としては、事故、代謝あるいは先天的疾患等があげられている。これらの調査から、トラベラー・コミュニティにおける健康問題は重要な課題となっていったといえる。1998年には、トラベラー健康諮問委員会（Traveller Health Advisory Committee）が設立され、2002年には全国トラベラー健康戦略（National Traveller Health Strategy）が採択される。2008年の全アイルランドトラベラー健康調査（All-Ireland Traveller Health Study）が開始され、2010年に236頁に渡る報告書へとまとめられた。この報告書で明らかになったポイントは

次のことである。

・平均寿命は、1987年調査とほぼ変わらず、男性が61.7才。これは一般的なアイルランド人男性の1940年代と同じである。また、一般男性の平均寿命は、2010年段階では75才であり、その差は15年になった。

・女性の平均寿命は、70才であり、1987年よりも5年ほど延長された。しかし、一般女性との差は11.5年となっており、こちらにも大きな差がみられる。

・呼吸器疾患、循環器疾患、そして自殺率の高さは、一般的な死因と比べると特に高い。

以上の結果から明らかなことは、様々な調査や委員会の設立にもかかわらず、とりわけ男性の健康問題に改善はほとんどみられないということである。報告書では、肯定的な結果といえるのは、女性の健康問題について改善がみられる点と、例えば子宮頸部や胸部検診などへの理解、アクセスが向上したことであり、一般女性の検診比率とほぼ変わらないと指摘されている⁹⁾。

居住、教育および職業訓練

1960年代以前には、ほとんどが地方に居住していたとされるが、都市化、産業化によって、トラベラーたちの生活圏も都市に集中していくことになる。しかしながら、J. Curryは、居住形態の問題は常に議論の的となってきたと指摘している¹⁰⁾。現在、トラベラーのほとんどは「移動」することはない。住居自体は2001年に達しても、ほとんどが40年前と変わらず沿道のトレーラーハウスなどであったが、トラベラーの数が増加していくことから、単純には比較できない。1998年に住宅供給法(Traveller Accommodation Act)が制定され、法的なフレームワークが示された。かつ、この法によって、地方自治体にトラベラーのための住宅供給プログラムの策定が求められた。これらの法律が適正に実行されていれば、トラベラーの居住環境は変化をみていたかもしれないが、こ

の政策の各自治体における取り組みは遅く、十分な供給が不可能であった。2008年の報告では、8,398家族がいくつかの異なる形態において生活している。

・3,330家族、標準的な住居

・1,516家族、民間賃貸住宅

・691家族、集合住宅

・574家族、halting site と呼ばれるトラベラーの人びとの居住区画(トレーラーハウスなど)

・345家族、他の家族とのシェア

・524家族、未認可の場所での居住

報告書によれば、未認可の場所やシェアハウスに居住する家族は徐々に減少しており、民間賃貸住宅が大幅に増加している。2006年国勢調査では、20,975人が都市周辺に居住しているとする。しかし、現在でも、halting site をめぐるトラブルがあり、暴力、ドラッグ、不法投棄などを懸念する住民らの偏見も根強い。そしてこのことが、トラベラーの人びとをめぐる差別の背景の1つであるといえるだろう。そのため、住宅問題の改善は重要な課題となっている。

学校教育への関与についても大きな特徴がみられる。1960年には、1,640人中160人の児童(6-14才)が通学している。しかし識字率の低さは、トラベラー社会の生活様式が変化しにくいことの特徴であると考えられていた。1980年代までに、通学率は向上するが(3,500人程度)、多くが特別クラスや特別学校に通っており、セカンダリーレベル(ほぼ日本の中学・高校と同じ)への進学はほとんどみられず、90%が読み書きができないとされた。1990年代になると、4,200人程度が通学していると確認されるが、欠席の多さが課題であり、セカンダリーレベルに移行する率は低く、進学しても修了率は低いままであった。

2010年の報告書では、プライマリーレベル、セカンダリーレベルへの入学率は大きく改善される。しかしながら、セカンダリーレベルでは、80%以上が中退するという結果が示された。その背景には、15-19才頃に定住社会との文化的衝突がみら

れるようになることがあるとする。この時期に、一般的には将来のキャリアが重視され、そのための学業や職業訓練が優先されるようになる。しかしながら、トラベラー社会の同世代においては結婚が重視され、キャリア形成は重視されず、結果中退が多くなるとされている。また、教師や同級生からの差別や偏見によって、学業への関心が薄れることも指摘されている。そのため、失業率は非常に高く、2011年では25-45歳の男性のうち74%が失業しているとされる（一般では約7%）。早期に学校制度から離反するトラベラーの若者のために、1974年に全国に教育・職業訓練センターが設立され、共和国で27カ所に及び、18才以上で学歴を持たないトラベラーが対象となっている¹¹⁾。近年では、経済不況のために、資格取得のために学校に戻って学位を収めるケースや、職業訓練などを受け直すケースもみられるという。

エスニックマイノリティとしてのトラベラー

2000年の平等法（The Equal Status Act）によって、トラベラーは次のように定義されるに至った。「『トラベラー・コミュニティ』とは、一般にトラベラーズと呼ばれ、かつ歴史的にはアイルランド島における放浪の生活様式を含む、歴史、文化、伝統を、（自分たちおよび他者によって）共有していると認識している人びとのコミュニティである」。

1995年の特別調査委員会報告では、トラベラーの人びとを「独特な文化とアイデンティティ」を持った集団という見解を示した。そのような認識は1960年代初期から、トラベラーの人びとによっても共有され、トラベラーという用語についても彼ら自身も用いるようになった¹²⁾。H. ToveyとP. Shareは、エスニックグループとしての自己認識が、どのようにトラベラー自身や政策決定過程に影響を与えたのかは検討する必要があるとする¹³⁾。例えば、トラベラーを象徴してきた「貧しさの文化」という言説からエスニシティへの変化

は、彼ら自身をエンパワーしてきたのだろうか？ 様々な支援団体が形成される中で、社会運動として重要な働きをしている団体の1つとして1980年代初頭に結成された、The Dublin Traveller's Education and Development Group (DTEDG、現在 Pavee Point) があげられている。それまでの団体が、非トラベラー（アイルランド人）のソーシャルワーカーや専門家のみで構成され、トラベラーの「ために」、すなわちトラベラーと「共に」ではなく、運営されてきた。それに対し、DTEDGは、1985年の設立当初からトラベラーをエスニックマイノリティとして捉え、「彼らとのどのような協働も、彼らのアイデンティティの発展及び保持するための権利を助けるものであるべきである・・・さらに、私たちがもつスキルは、アイルランド社会における正義と受容のための闘争においてトラベラーの人びとをサポートするために提供するものである」と、当時の責任者であるJ. O'Connellは述べている¹⁴⁾。

現在 Pavee Point では、次のように説明する。「トラベラーの人びとは、国連が定めるエスニシティの判定基準を満たしている。(略)トラベラーは、普及した慣習を持ち、強固な血統を保持し、共通の歴史、およびマジョリティの普及した慣習や伝統とは異なる習慣や伝統を共有しており、そして自らと（他者によって）特徴的であることを認識している」

N. エリアスとJ. L. スコットソンは、定着者（establishment）と後から入植してきた人びと（outsider）の葛藤と対立において、定着者から新興の人びとに向けられる、排除のゴシップや非難、軽蔑のまなざしが、どのように彼らの分断を維持するために機能したのか分析している。それは、「自分自身[新興の人びと]の一部、自分自身の良心が『村人たち』[定着者]がかれらの近隣地区に下す低い評価と一致したからである。この無言の同意こそ相手に報復し、自らを主張する彼らの能力を麻痺させたのである」¹⁵⁾。自らをマジョリティの「劣った」一部としてではなく、異なる

特徴を持つエスニックグループとして認識することは、社会における自らの位置づけを再構成する重要なステップとなると考えられうる。

ボクシング

学業や職業によるキャリア形成にさまざまな障壁がみられる中、スポーツは、社会上昇の重要な位置づけを担っている。2010年報告書では、重要な収入源として馬の売買、古美術売買や音楽家などとならんで、スポーツがあげられている。人びとの生活様式が変化する中で、放浪しながら営んできた様々な職業（例えば金物修理等）が適合しなくなったからである。

トラベラーの人びとと関わりの深いスポーツに、ボクシングがあげられる。多くの父親が息子にはボクシングをすることを望む傾向があるという。しかし、この「ボクシング」はしばしば「非合法」のものが指摘されている。素手で戦う「Bare-knuckle fighting(boxing)」と呼ばれるアンダーグラウンドのボクシングである¹⁶⁾。長い間、Bare-knuckle fightingは、コミュニティの祭りなどの際に行われ、多くの観客の娯楽の1つであった。しかしながら、その荒々しさ、激しさから、主催者は試合を秘密裏に行うようになる。秘密裏に行うようになる別な理由としては、この試合が、相対する選手同士だけではなく、反目する親族間のけんかを引き起こすことになるからであった。トラベラー・コミュニティにおける特徴の1つにその親族内の結束の強さがあげられる。そのため、トラベラー・コミュニティとは、ある1つの集団を指すのではなく、個々の親族(clan)の集まりであるともいわれている。N. Houriganは、1960年代に政府がトラベラーの人びとへの定住を促し始めたとき、この家族の結束は別な結果をもたらしたとする¹⁷⁾。それまでの放浪生活では、トラブルが生じれば別な場所に移動すればよかったが、定住生活では緊張は高まるだけである。その緊張の解消にBare-knuckle fightingが行われると

考えられる。しかし、2008年には、北東部のMullingarで、Bare-knuckle fightingをきっかけとした100人以上を巻き込む抗争が起きている¹⁸⁾。さらに、Bare-knuckle fightingは賭の行われる場所でもある。試合は、選手とFair-play menと呼ばれる立会人と、数名によって行われるが、その模様はビデオに撮影され後々賭の対象となる。スポーツのボクシングとの大きな違いは、どちらかがダウンするまでに何時間でも続けられるという点と、試合が終了したからといって、親族同士の反目は解決しないという点である。E. Dillonは、トラベラーの伝統的ボクシングが暴力の高まりによって崩壊してしまったこと、それが犯罪の温床になることを指摘している¹⁹⁾。そしてそれが一部のトラベラーであっても、従来の文化イメージと結びつき、偏見や差別を助長するとも考えられる。

他方で、ボクシングからは、多くの活躍するトラベラー出身の選手がでており、若い世代が参加するスポーツである。2008年の北京五輪のボクシングチームでは、「全人口1%未満のトラベラー・コミュニティから、チームの20%のボクシング選手が選出された」と、トラベラーのための情報誌では大きく取り上げられている²⁰⁾。Francis Barrettはアトランタ五輪で旗手を務め、2012年ロンドン五輪で銀メダルを獲得したJohn Joe Nevinは、アイルランド人で唯一2度の世界チャンピオンでもあり、ロールモデルとなっている。

まとめにかえて

2012年ロンドン五輪において、ボクシングは初採用された女子のライト級で優勝したKatie Taylorも含めて、銀1つ、銅2つの4つのメダルをアイルランドにもたらした。他の競技では馬術がメダルを獲得しただけであるので、その結果は驚くべきものといえるだろう。興味深いのは、彼らボクサーのほとんどが、アイルランド社会におけるマイノリティ出身であることだろう。Taylorは、今回唯一の金メダリストであるだけでなく、

アイルランドのオリンピック史上、女性で2人目の金メダリストでもある。帰国後の地元 Bray のセレモニーには2万人が集まった。ヨーロッパ選手権、世界選手権、及び五輪を制覇した彼女は、父親がイングランド出身の原理主義的福音主義者（プロテスタント）である。また、銅メダルを獲得した Michael Conlan と Paddy Barnes はベルファスト出身のカソリックである。そして、トラベラー出身の John Joe Nevin である。それぞれが帰国後地元でアイルランド代表として篤い歓迎をうけた。彼らがどのように受容されていくのか、アイルランド社会における多様性のあり方を示すものかどうかについてはこれからも検討する必要がある。大会期間中には、Nevin の家族が試合を観戦しようとしたところ、パブに入店を拒否されるという事件が起こった。そのため、家族は決勝戦も町ではなく、郊外のパブで観戦したという²⁰⁾。Barrett は「これはレイシズムであり、政府が対応策をとるべきだ」と批判したが、トラベラーに対する状況が簡単に変化することはないとも語っている。Barrnet 自身も五輪後入店することを断られた経験があるという。しかし、「私はプライドをもっている・・・自分の達成したことに、そして世界で最も大きなイベントで旗手を務めたことに」と語っている。家族が入店を拒否される一方、決勝戦は5,000人の住民が Mullingar の中心部のパブリックビューイングで観戦し、人口約2万人の町で6,000人以上が帰国を祝うために集まった。帰国後 Nevin は、スポーツを通じて人種差別をなくす運動を続けている Sport Against Racism Ireland (SARI) のサッカー大会に参加し、支援にも携わっている。アイルランドにおけるエスニックマイノリティをめぐる状況は、様々に変化しており、今後当事者たちがどのように運動や政策決定に係わっていくかが重要な課題となっている。

【注】

1) R. McVeigh/R. Lentin(eds), *Racism and Anti-racism in Ireland*, Beyond the Pale Publications, 2002, p.49.

- 2) <http://www.independent.ie/national-news/attacks-threaten-450m-business-321828.html>
- 3) R. McVeigh/R. Lentin, p.2.
- 4) B. Fanning, *Racism and Social Change in the Republic of Ireland*, Manchester University Press, 2003, p. 13.
- 5) B. Fanning, p.18.
- 6) All Ireland Traveller Health Study, 2010. 北アイルランドの数字は、2001年の北アイルランド国勢調査による。
- 7) 18世紀頃に、アイルランド語と英語の結合によってつくられたと考えられている。
- 8) Report for the Commission on Itinerancy, 1963.
- 9) J. Curry, *Irish Social Services*, Dublin: Institute of Public Administration, 2011.
- 10) J. Curry, p.221.
- 11) “Travellers over 50 are few, says ESRI”, *The Irish Times*, March 23, 2012.
<http://www.sttc.ie> プログラムは、職業訓練だけではなく、英語、数学等のコース、スポーツ、アート、宗教など、幅広く提供されている。
- 12) 「Pavee」や「Minceirs」という彼らの言語による呼び方も使われている。
- 13) H.Tovey/ P. Share, *Sociology of Ireland*, Gill & Macmillan, 2003(2nd), p.471.
- 14) H.Tovey/ P. Share, p.472.
- 15) N.エリアス/J. L. スコットソン『定着者と部外者』法政大学出版局、2009年、173頁。
- 16) あるいは「Fist fight (握り拳での殴り合い)」
E. Dillion, *The Outsiders*, Merlin, 2006, p.91.
2012年アイルランド国営放送(RTE)が制作したドキュメンタリー『Knuckle』は、10年に渡る2つの反目する親族間の争いを、Bare-knuckle fightingを中心に描いている。
- 17) N. Hourigan, *The Sociology of Feuding, Understanding Limerick*, N. Hourigan(de), 2011, p.106.
- 18) Hourigan, p.106.
- 19) E. Dillon, p.113.
- 20) *Voice of the Traveller*, Issue64, 2008. B. O Conaire, *History Ireland*, Vol. 20, No. 4, 2012, p. 47.
- 21) *The Irish Independent*, August 15 2012.